

2017（平成 29）年度 東京大学 入試問題 第 4 問（文系） 解答例

一 筆者の父親は、子供たちの好む花実の付く木を与え、また、木の葉の知識を競わせ、自然とより親しむよう面倒をみたということ。

＊「父はまた」という並列を見落とさないように。文学的な文章だからといって、論理的な解答構成が不要なわけでは決していない。「木の葉の名を当てさせ、覚えさせる」の趣旨が解答には必要である。

二 草木の理解に聡い姉に対して、素質の劣る筆者はかなわず、父親と姉の和やかな様が妬ましく、一人疎外感を覚えたということ。

＊「嫉妬の淋しさ」は、「妬ましく、孤独（疎外感）を覚える」の意。ただ悲しいのではない。「一人」であることが重要である。正確な解答要素の把握と表現に心がけよう。

＊ここでの「うしろから一人でついていく」という描写が、後の「父と並んで無言で佇んでいた」ことの「飽和」感につながっていることも、無理なく理解できるであろう。

三 眼前の花木を教材とした父親の話は、子供の遊びの面白さと全く異なり、筆者は直接的に体感できる感動や興奮を覚えたから。

＊「ぴたっと身に貼りつく」の適切な置換が必要である。

四 陽と花と虻と水だけ感じる廃園で、ひときわ勝れた藤の花を父親と二人で眺めて魅了され、筆者は満ち足りていたと思った。

＊「陽と花と虻と水だけが感じられる」（自然）廃と「父と並んで」の二点に由来する恍惚感である。